



FD NEWSLETTER

CENTER FOR
TEACHING AND
LEARNING

INTERNATIONAL
CHRISTIAN
UNIVERSITY

TOKYO, JAPAN

Vol. 26
No. 2

March 2022



目次

1. 2021 年度新任教員 FD プログラム (NFDP) 活動報告 ... 1
2. 新任教員 FD プログラム (NFDP)
鄭仁星教授による「シラバス・デベロップメント」の回について ... 4
3. 第 12 回 CTL Brown Bag Lunch & Learn
「Oxford EMI - ICU 言語教育メジャーの実践例」 ... 7
4. ICT Workshop 活動報告 ... 12
5. ICT Workshop
『オンライン授業の学修効果は双方向性によって高まる』 ... 13
6. 新企画「ICU における教育のベストプラクティス:成功する国際化」 ... 16
7. TA 向けオリエンテーション、ワークショップ活動報告 ... 17

2021 年度新任教員 FD プログラム (NFDP) 活動報告

今年度の New Faculty Development Program (NFDP) が終了しました。NFDP は新任教員のための FD プログラムで 2017 年に開始し、少しずつ形を変えながら今回で 5 年目です。プログラムはオンデマンドとライブセッションのパートがあり、ライブセッションは秋学期の毎週火曜日 3 限に行われています。今年度は秋学期のセッションに加え、「アカデミック・アドヴァイジング」についてのセッションを秋学期直前に行いました。4 月に着任した教員が秋学期よりアドヴァイジーを持つにあたり、履修登録日の直前を開催日としました。

以下は今年度のセッションの記録です。ご協力いただいた先生方、誠にありがとうございました。

2021 年度 NFDP ライブセッションの記録

4 月 7 日	<p>NFDP キックオフセッション 学修・教育センター(CTL)と特別学修支援(SNSS) 対象：4 月着任教員 CTL センター長 ジェレマイア・オルバーグ先生(哲学・宗教学、平和研究) CTL 副センター長 ヘザー・モンゴメリ先生(経済学、グローバル研究)</p> <p>♪ 4 月着任の先生の顔合わせも兼ねた会でした。</p>
8 月 31 日	<p>アカデミック・アドヴァイジング、学修が順調でない学生へのアドヴァイジング Academic Advising and Advising Struggling Students CTL 副センター長 ヘザー・モンゴメリ先生(経済学、グローバル研究) 教養学部 副部長(学修支援担当) 小林 潤司先生(化学)</p> <p>♪ 4 月に着任した教員が秋学期よりアドヴァイジーを持つにあたり、履修登録日の直前に行いました。表題の話題の他に、履修登録日のアドヴァイジングの具体的な流れなどが話されました。</p>
9 月 6 日	<p>NFDP キックオフセッション 学修・教育センター(CTL)と特別学修支援(SNSS) 対象：9 月着任教員 CTL センター長 ジェレマイア・オルバーグ先生(哲学・宗教学、平和研究) CTL 副センター長 ヘザー・モンゴメリ先生(経済学、グローバル研究)</p>
9 月 7 日	<p>第 1 回：ICU の設立、意義、使命、そしてこれからの評価 The founding of ICU, ICU's values and missions, and assessing the future 学務副学長 ロバート・エスキルドセン先生(歴史学、日本研究)</p> <p>♪ 湯浅八郎記念館で行いました。参加者からは「ICU の歴史を実際に湯浅八郎記念館を訪れて知ることができてよかった」「これから ICU で働く上で、ICU の設立時のお話などを詳しく聞くことができ、より理念やミッションについての理解が深まりました」等の感想がありました。</p>

9月14日	<p>第2回：教育・研究・アドミニストレーション業務のバランス Balancing Teaching, Research & Administration 教養学部 部長 石生 義人先生（社会学、アメリカ研究） 教養学部 副部長（カリキュラム担当） 生駒 夏美先生（文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究）</p> <p>♪ 私生活の時間も大切にしながら、ICUの教員として教育と研究、アドミニストレーション業務を行うには、どのように時間を管理しバランスを取っていけば良いのか、自らのご経験のお話とアドバイスがありました。</p>
9月21日	<p>第3回：キリスト教の信仰とリベラルアーツ教育 Christian Beliefs and Liberal Arts Education 大学牧師 ポール・ジョンソン先生、北中 晶子先生 宗務委員長 石橋 圭介先生(情報科学)</p> <p>♪ 「ICUのなかで"C"がどのように体現され、考えられているのか、先生方からお話を聞くことができよかったです」等の感想がありました。</p>
9月28日	<p>第4回：学生を教育・学修のパートナーとして巻き込むには Engaging Students as Partners in Teaching and Learning 辻田 麻里先生（言語教育）</p> <p>♪ 先生がミックス式授業を行っている本館213教室で開催しました。実践されている様々な教授法や、オンライン授業でもより学生がアクティブに参加できるような工夫などの紹介後、意見交換が行われました。</p>
10月5日	<p>第5回：キャンパスツアー Behind-the-Scenes Campus Tour CTL スタッフ</p> <p>♪ 事務部署や建物を紹介しました。また、カウンセリングセンター、研究戦略支援センター、サービスラーニングセンターも訪問し活動実績や役割等の話を伺うことができました。</p>
10月12日	<p>第6回：シラバス・デベロップメント Syllabus Development 鄭 仁星先生（教育学）</p> <p>♪ 「自分のシラバスを他の先生方に見てもらう機会は滅多にないので、いただいた意見を次年度以降のシラバス作成に役立てていきたい」等の感想がありました。</p>
10月19日	<p>第7回：ICUの一般教育科目 General Education at ICU 教養学部 副部長（カリキュラム担当） 生駒 夏美先生（文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究）</p> <p>♪ 「ICUにおける General Education（一般教育科目）の独自性、全体の教育活動のなかで占める重要性について、この機会に理解を深めることができました」等の感想がありました。</p>

10月26日	<p>第8回：アセスメント、フィードバック、成績評価 Assessments, Feedback and Grading ショウン・マラーニー先生(人類学、グローバル研究)</p> <p>♪ 課題設定のポイント、評価の基準や成績について学生にしっかり伝えるための工夫、具体的なテクニックが、先生のコース Moodle と共に紹介されました。</p>
11月2日	<p>第9回：第二言語での教育とコミュニケーション Teaching and Communication in a Second Language 森島 泰則先生(心理学)</p> <p>♪ ICU 生の多様な言語的背景についての説明の後、バイリンガリズムと脳 (Bilingualism and Brain) についてのご自身の研究の話にも触れられた会でした。</p>
11月9日	<p>第10回：Q&A セッション、懇談 / Social/Q&A Session</p> <p>♪ ダイアログハウス7階の教職員ラウンジで対面で行いました。実際に同期で会って懇談が持てる、貴重な会となりました。会の後半には学長、学務副学長にもお越しいただきました。</p>
11月16日	<p>第11回：多様性とインクルージョンに対応した教育 Teaching for Diversity and Inclusivity 西村 幹子先生(教育学、開発研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、平和研究)</p> <p>♪ ディスカッションやロールプレイを交えながら、活発な意見交換が行われました。「異なる立場の学生の気持ちを理解するために、マイノリティ／マジョリティとしての自分の気持ちを振り返らせるというのは、とても良いアイデアでした」等の感想がありました。</p>

(学修・教育センター)



2021年度 NFDП 修了証授与式

新任教員 FD プログラム (NFDP) : 鄭仁星教授による「シラバス・デベロップメント」の回について

2021 年度新任教員 FD プログラム (NFDP: New Faculty Development Program) が終了しました。この記事では今年度行われた 13 セッションの中から、鄭仁星教授の「シラバス・デベロップメント」の回を紹介します。なお、NFDP は鄭教授を中心としたチームが設計・開発を行い、2017 年度に開始した新任教員のための FD プログラムです。各回にファシリテーターとして教員を迎えて、秋学期毎週火曜日 3 限に行っています。



AY2021 NFDP 「シラバス・デベロップメント」
2021 年 10 月 12 日 第 3 限 (11:30-12:40)
ファシリテーター：鄭仁星教授 (教育学メジャー)

セッションは、アイスブレイクの後、「Kahoot!」を使ってシラバス・デザイン・クイズで始まりました。

シラバス・デザイン・クイズ *ハイライトされている回答が正解です。

問 1	よいシラバスは、コース・デザインを良く考え抜かれた上に成り立つ	○、×
問 2	次のうちシラバスに含まれている必要がないものは	1. コース・タイトル 2. 各週のスケジュール 3. 評価方法 4. 学生の名前
問 3	シラバスは、教員がコースで何を教えるかを保証する説明ツールである	○、×
問 4	詳しいシラバスは	1. 学生の学修を妨げる 2. 学生の心配を軽減する 3. 学生の誤解を生む 4. 学生の作業負担を増やす
問 5	効果的なシラバスは、コースの方向性を示す	○、×

シラバス評価ルーブリックの紹介

クイズの後、シラバスは教員にとってコースデザインのはじめの一步であること、学生にとって履修計画の際の重要な役割を果たし、コースについての疑問が生じた際に戻って詳細を確認出来るツールであることが話されました。

次に、シラバスをチェックするためのルーブリックが紹介されました。コーネル大学が開発したルーブリックに、鄭教授が少し変更を加えたものです。

ループブリックの黄色でハイライトされた要素「Course Outcomes（授業成果）」「Class Schedule（クラス・スケジュール）」「Assignments Required（課題）」「Assessing Students' Learning（成績評価）」「Diversity of Teaching & Assessment Methods（授業・成績評価方法の多様性）」を今回の NFDP では確認しました。

- 「Course Outcomes（授業成果）」（ICU のシラバス・テンプレートでは Learning Goals／学修目標の箇所に当たります）
「学修の到達点」や「学生に何を不得欲しいか」が述べられる箇所です。この箇所は、学生が学修計画を立てやすいように、出来るだけ具体的な内容にしたいです。具体的な学修目標の設定は、教員側の授業計画や、成績評価を行いやすくすることに通じます。カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UC San Diego) の [「授業成果の書き方-ABCD 方式」](#) です。この例にあるように、成果は学生の視点で書きます。
- 「Class Schedule（クラス・スケジュール）」
各週のトピックはあるが、具体的に学生が何をすべきかが載せられていない場合があります。ループブリックでは、「各授業のトピックがリーディング課題やプレゼンテーション課題と共に時系列に記載され、繋がりがあり、論理的に順序だっている」クラス・スケジュールが模範であるとされています。
- 「Assignments Required（課題）」
課題は何か、期限はいつかを明確に。ループブリックでは「課題と提出期限のリスト、提出期限を過ぎた場合のポリシー、成績に影響するその他の要件」を述べるのが模範的であるとされています。
- 「Assessing Students' Learning（成績評価）」
「Assignments Required（課題）」と繋がりが深い箇所ですが、成績評価の項目には評価基準や評価ループブリックがあるとよいでしょう。シラバスとは別に、評価ループブリックを提示している教員もいると思いますが、学生にとって総合的なマニュアルとするため、シラバスに評価基準を載せています。
- 「Diversity of Teaching & Assessment Methods（授業・成績評価方法の多様性）」
1つの課題のみで成績評価を行うのは望ましくありません。教員が学生の多様性を考慮して指導および評価方法を選択し、多様な評価方法を提示するのが良いでしょう。学生が実際に授業成果に達しているか把握するためにも重要であり、教員自身が教え方を振り返る事にも役に立ちます。

EDU203 教育の方法・技術論のシラバス紹介

シラバス評価ループブリックの説明の後、新任教員は3人一組のグループに分かれ、それぞれのコースシラバスの「学修目標」と「評価」の箇所を見合い、良い点、改善可能な点をそれぞれ述べました。

その後、鄭教授の「EDU203 教育の方法・技術論」のシラバスが紹介されました。

- 「Learning Goals／学修目標」
まず学修目標は「Upon completion of this course, the students will be able to: このコースを修了すると、学生は次の事が出来るようになる」で始めています。Learning Goals の1番目に使用している「Understand／理解する」は、Bloom's Taxonomy によると、基礎の方のパートです（2ページ目参照：[Bloom's Revised Taxonomy of Learning Domains](#)）。そのため、学修目標に「Understand」が多

く見られる場合は、より高いレベルの目標を示す「Explain」「Apply」「Create」などを含むよう見直しが必要かもしれません。そうすることで、より高度な学修目標と批判的思考（クリティカル・シンキング）能力が提示されるようになります。

▪ 「Grading Policy／評価基準」

このシラバスでは、4つのパートに分けています。他の教員と比べ、かなり細かく書いていると思います。また、学生が自らの理解度を確認するように何度でも挑戦できるクイズを用意しています（シラバス4ページ目最下部）。

OECD Rubric on Creativity and Critical thinking

最後に、ICUのリベラルアーツ教育で重視している「Creativity／創造性」と「Critical Thinking／クリティカル・シンキング」の要素をどのようにシラバスに取り入れていけばよいか、という話題に移りました。そして「[OECD Rubric on Creativity and Critical thinking](#)」が紹介されました。鄭教授は、このルーブリックをきっかけに、ご自分のコースのシラバスに、「Creativity」と「Critical Thinking」の要素を意図的に取り入れる必要性を認識したと述べました。また、「Inquiring」、「Imagining」、「Doing」、「Reflecting」とレベルが分かれています。どれか一つの要素だけでも入れてみると良いかもしれない、と提案されました。

なお、紹介したルーブリックは汎用性のあるものですが、分野ごとのルーブリックもいくつかこの[OECD ウェブサイト](#)に紹介されています。

セッション後、参加者からは、「すぐにでも冬学期のシラバスを見直したい」や「シラバス作成時に、何を参考にすべきかとても悩んだ、記載すべきことや作成例について詳しく知ることが出来、勉強になった」という感想が寄せられました。鄭仁星先生、ありがとうございました。

(学修・教育センター 細野)

第 12 回 CTL Brown Bag Lunch & Learn

「Oxford EMI - ICU 言語教育メジャーの実践例」

ファシリテーター：教育学・言語教育デパートメント 辻田 麻里先生

2021 年 9 月 27 日に実施した第 12 回目の BBL&L では、言語教育メジャーの辻田麻里先生に、2020 年 3 月に参加された Oxford EMI プログラムについて、および Oxford EMI の内容をオンラインとミックス式授業にどのように応用しているかについてお話しいただきました。

1. Oxford EMI

EMI (English Medium Instruction) とは、“the use of the English language to teach academic subjects in countries or jurisdictions where the first language (L1) of the majority of the population is not English” (「人口の大半の第一言語 (L1) が英語ではない国・地域で、専門科目を英語で教えること」) (Dearden, 2014) と定義されています。Oxford EMI プログラムでは、英語で授業を行う大学講師の支援、および大学という環境における EMI での教育・学習に関する言語的な課題や教育学的な課題の調査を行っています。

辻田先生の発表内容の抜粋は以下の通りです。

言語的な課題への対応 (Oxford EMI) : ご自身の意見について、「はい」か「いいえ」でお答えください。

1. 難しい概念を説明するためであれば、時折その学生の母国語を使用してもよい。
2. 話している内容を理解してもらうためには、文法的な正確さがとても重要である。
3. 複雑な語彙を説明する際は、補助として同義語を使用すべきである。
4. 理解しやすい発音をする秘訣は、主に音と単語を正しく再現することである。
5. 授業で使用するスライドに専門用語を含める場合は、その用語の完全な定義を記載することが重要である。
6. 概念を説明する際には、例を挙げることも、定義と同様に有効である。
7. 学生は専門用語を理解するだけでなく、使えるようになる必要がある。
8. EMI では、L1 での学習環境よりも視覚的な表現を行うことが重要である。
9. 学生の英語力が向上するまでは、複雑な専門用語の使用は避けるべきである。
10. 講師の声が聞こえていれば、学習者が座っている場所を気にする必要はない。

(Oxford EMI の配布物より引用)

言語教育の概念

- **理解可能なインプット**: 教師が使用している言語を学習者に順応させること
 - 話し方 (例: 強調、音量、速度、間、繰り返し)
 - **インプットの修正** (例: 構文や語彙の単純化、言い換え、対比、例示、マーカーを使用して話題の転換を示すなど)

(Oxford EMI の配布物より引用)

教育学的な概念

- **思考スキル**
 - 言語化 (例: ペアワーク)
 - 情報の削減 (例: 最も重要な単語の抽出)
 - 情報の変換 (例: 文字情報ではなく図を使用)
 - テキストの並び替え (例: 正しい順序に並び替える)
 - 類推 (アナロジー) の使用 (例: 「温室効果ガス」、「足場かけ」)
 - 予測 (例: 読む前に内容を推測する)
 - 分類 (例: データを種類に分ける)
 - 認知マップの作成 (例: 異なる概念間のつながりを示す)
 - 順位付け (例: タスクの優先順位を付ける)
- **思考を促す質問**
 - **明確な説明**を求める (それは、どういう意味ですか?)
 - **理由や根拠**を求める (それはなぜですか?)
 - **異なる見方**を検討する (違う点は何ですか?)
 - **意味合い**、およびその**影響**を試す (それによる影響にはどのようなものがありますか?)
 - **質問や対話**について (次に質問すべき内容は何ですか?)

(Oxford EMI の配布物より引用)

ケース スタディー: テクノロジーを使用した教育

- Moodle と Slack を使用して学生の参加を促す
 - Tilma 准教授 (東京工業大学、物理学科)
 - **Slack** は、メールが多すぎることに、授業中に質問がないことという2つの問題を解決する。
 - **Moodle** は教材の整理に便利で、学生は自身の課題の進捗を追跡することができる。
 - これらのツールは、授業外の課題への**参加を促し**、印刷物をゼロにし、学生が自身の学習の**主導権を得られる**ようにする。

(Oxford EMI の配布物より引用)

2. Oxford EMI の内容をどのように授業に応用したか

Oxford EMI のコンセプトとヒントについて触れた後、オンライン授業とミックス式授業の両方で、辻田先生が Oxford EMI の内容をどのように応用しているかについて紹介してくださいました。今学期に担当された、日本語開講の LED233「英語科教育法 I」(受講者数 28 名) を例としてお話しされました。

受講している学生のほとんどが英語科教職課程を履修していることもあり、グループ発表や模擬授業を通じて、学生たちが互いに教え合う機会を設けていらっしゃるそうです。また、Oxford EMI プログラムで学んだ、学生の参加を促す以下のようなアクティビティも取り入れていらっしゃいます。

- グループ ディスカッション (Zoom のブレイクアウト ルーム、Google スライド)
- 講義中の質問 (Zoom のチャット機能)
- 学生にクイズの問題 (小問題) を作成してもらい (Word ファイルを Moodle で提出してもらい、Moodle Quiz で実施)
- 投票 (Zoom の投票機能)
- デイベート (英語で実施)

投票の事例として、辻田先生から学生に、家族や年上の人を 1 人思い浮かべて次の質問に対する答えを学生に考えてもらった時のことを共有してくださいました。

「その人は、過去 1 年間に、以下の活動を英語で行ったことはありましたか？仕事、海外の友人とのコミュニケーション、映画、音楽、読書、インターネット、海外旅行、なし、の中から該当するものをすべて選んでください。」

主に英語を使用している家庭で育ったある学生は、6 割の人がまったく英語を使わないという結果を知って驚いていたそうです。

また、Debating Society のメンバーである卒業生をゲストコメンテーターとして授業に招き、「日本において、中学・高校では英語を選択科目にすべきか、および小学校では英語を義務化すべきか」について、学生たちに英語でデイベートを行ってもらった例についてもお話ししてくださいました。学生の一人は、「デイベートを行うことで、生徒はスピーチに向けた準備や強固な主張を行う方法などを間接的に学ぶことができ、問題解決やクリティカルシンキングの能力の促進にもつながる」と実感していたそうです。

3. 学生アンケート

セッションの最後には、2021 年 9 月にオンラインで実施した学生アンケート (回答数 9 件) の結果を報告してくださいました。オンライン授業とミックス式授業では、回答者の大半 (7~8 人) が、コースの題材、資格取得のための要件、参加型のスタイル、および担当教員が、モチベーションに影響すると回答していたことです。また、ある学生から次のようなコメントがあったそうです。「最も重要な点は、教授の講義の進め方と、そのトピックに対する自分の興味です。例えば、要点の解説が曖昧であったり、話し方が淡々としていたりすると、オンライン環境では視覚的な情報が変わらないので、つまらなく感じてしまいます。また、教授と学生の唯一の接点である、フィードバックも重要だと思います。」

その他の質問と学生の回答は、以下のとおりです。

3.オンライン授業の良かった点、満足した点は何ですか？

- 通学の手間が省ける（ラッシュ時や雨の日に通学する必要がない、勉強時間が増える、朝や夜の時間帯の授業に便利）
- 東京に居なくても授業を受けることができる
- すべてをデジタルで管理することができる
- より集中できる（他人に気を取られない）
- よりリラックスできる（カメをオフにしているため）
- クラスメイトと会う機会が限られている中、グループ・アクティビティで交流できること（ブレイクアートルーム）

4.オンライン授業の問題点、不満だった点は何ですか？

- 集中できない（同じ場所に居続けることに疲れる）
- 「家」と「学校」の切り替えが難しい
- 他の学生との交流が少ない（交流はブレイクアートルームの時間に限られ、授業の前後にはそのような時間がない）
- 先生がオンラインツールを使いこなせていないと、時間が無駄になる
- 学生がカメラとマイクをオフにしている場合、学生が参加しているかどうか分からない
- 質問がしにくい

5.ミックス式授業の良かった点、満足した点は何ですか？

- 必要に応じて対面とオンラインを切り替えることができる
- 参加しているという実感を得ることができる
- 環境が変化する方が、日常生活には良い
- 学生や教授と話すことができる
- 質問がしやすい

6.ミックス式授業の問題点、不満だった点は何ですか？

- 対面でのサポートとオンラインでのサポートにギャップがある（オンライン受講生とのコミュニケーションが少ない、対面の学生に対する対応の方が多い）
- 対面授業の参加者数が少ない場合に不安になる（教室にいる人によっては友達を作るのが難しい）

ICUでは、教員が [Oxford EMI プログラム](#)に参加できるよう、2016年から参加費を負担しており、2022年3月にオンラインで開催される Oxford EMI プログラムにも数名の先生方のご参加を支援する予定です。

参考文献

Dearden, J. (2014). English as a medium of instruction: A growing phenomenon. Teaching English. British Council.

Oxford EMI. (2019). 講義の配布物、Oxford EMI プログラム、オンライン開催

(学修・教育センター)



辻田先生からのコメント

個人的には、以下の理由から、Oxford EMI をすべての先生方にお勧めします。

1. 教育や、教育に関連する分野の有用なスキル、テクニック、概念について学ぶことができる。
2. 自分自身の言語の使い方や、教え方を振り返るきっかけになる。
3. 学生の側に立って、学生たちが経験していることを理解する機会を与えてくれる。

それだけでなく、日本中の様々な分野の人たちと、自分の考えや悩みを共有することができます。

ICT Workshop 活動報告

Keeping Online & Mixed-Mode Classes Interactive

Center for Teaching and Learning
ICT Workshop
Date : Tuesday, November 16th
Time: 13:50~15:00 cases + Q&A
~ 15:30 informal discussion)

2021 年度冬学期の授業方針を受け、CTL は 11 月 16 日（火）に「オンラインクラスとミックス式クラスをインタラクティブに保つには」というテーマで ICT ワークショップを実施しました。

ICT ワークショップはオンライン授業を開始した 2020 年 4 月から次学期の授業形態にあわせて継続的に実施しており、5 回目となります。

今回は 50 名ほどの教職員にご参加いただき、ケーススタディとして松田浩道先生、アダム・スミス先生、ショウン・マラーニー先生よりオンライン授業で実践されている様々なオンラインツールの活用例や、教育的効果をあげるための工夫を紹介していただきました。その後の質疑応答は、授業運営の悩みやヒントを互いに意見交換する良い機会となりました。

【日時】 11 月 16 日（月） 13:50-15:00

【言語】 日本語・英語

【実施方法】 オンライン（Zoom）

【内容】

- 挨拶、（モンゴメリ CTL 副センター長）
- 事例紹介（ファシリテーター：モンゴメリ CTL 副センター長）
 1. 松田 浩道先生 Interactive HyFlex (Type 3 mixed) class using mmhmm
 2. アダム・スミス先生 Interactivity and perceived learning in large online courses
 3. ショウン・マラーニー先生 Introducing Mentimeter & Google Form
 4. ダニエル・マルシャレス先生 The software/app is called OBS
- Q and A セッション

【参加者数】 教員 35 名+職員 11 名

今号ではその中から、アダム・スミス先生の記事を紹介します。

（学修・教育センター）

『オンライン授業の学修効果は双方向性によって高まる』



心理学・言語学デパートメント
アダム・スミス

COVID-19 によるパンデミックという激動の時代を生き抜いてきたすべての教員と同様に、私もオンライン教育の現場で苦勞する中で、いくつかの経験を得ることができました。このような個々の経験はひとつひとつが貴重なエピソードで、そういったエピソードが複数集まると、データを形成していきます。幸いなことに、名古屋大学の共同研究者と私でオンライン教育に関してかなり充実した実証データを集めることができました。ここで得た「オンライン授業において双方向性が学習実感 (perceived learning) を有意にかつ大幅に向上させる」という初期の知見は、すべての教員が知っておくべき内容であると思います。

私たちは名古屋大学に所属する 600 人以上の学部生を対象に、2019 年の冬学期 (パンデミック前に全授業を対面で実施) と 2020 年の春学期 (全授業をオンラインに移行) に実施された複数の授業を無作為に抽出し、学業成績、精神的充足度、学習の実感値などに関するさまざまな結果を調査しました。なお、実際の学習を測ることは非常に難しいため、代わりに主観的な、つまり「実感値」での自己評価を測定しました。現在進行形で増え続けている他の文献の内容と同様に、対面式の授業に比べて、オンライン授業に参加した学生の成績は上昇する傾向にあることがわかりました。しかし、逆説的に、全体的な学習実感は減少する傾向にあります。学習実感の低下という残念な結果を受けて、教員たちは、なぜ成績が上がる一方で学習実感が下がるのかと考えるのが自然でしょう。この答えは単純に、オンライン授業において成績は上昇しやすい性質を持つ

一方で、全体的な学習やエンゲージメントは下がりやすい性質を持っているということです。幸いなことに、この苦境を脱する方法はあると言えるでしょう。オンライン授業がある条件を満たしている場合、オンライン移行による学習の減少を和らげるだけでなく、むしろ上げることさえ可能であることがわかりました。その条件とは、高い双方向性を担保するということです。

以下に、2021 年冬学期に ICU でオンライン授業を担当する教員の皆さん向けに、「双方向性」が重要であるという考えに基づいて、いくつかの実践的なアイデアをご紹介します。これらのアイデアは先ほどお話した「エピソード」の類い、つまり私自身の経験や同僚との情報共有に基づいたものに過ぎません。お好きなようにご活用いただければ幸いです。

同期型の授業を行う

先生方には非同期型の教育プラットフォーム (例: YouTube を使用したオンデマンドの動画) ではなく、同期型の教育プラットフォーム (例: Zoom) を可能な限り使用することをお勧めします。双方向性のベクトルの内、学習効果を高めるために最も影響を与えているのは、何よりも授業形態であるようです。想定した通り、学生は教員や他の学生と同時に授業に参加した時に、より多くのことを学ぶようです。同様に、同期授業内での双方向性を高めれば、さらに学習効果を高めることができると推察されます。

Web カメラはオンで

授業開始時には、Web カメラをオフにしておく特別な理由がない限り、Web カメラをオンにするよう学生に指示します。また、Web カメラをオフにせざるを得ない場合は、教員宛ての個人チャットで理由を述べてもらうことをお勧めします。Web カメラをオフにすることを躊躇させることで、学生がクラスで進んで交流しやすくなりました。

いつでも質問を受け付ける

講義を行っている間、学生にはチャットで質問をしてもらおうようにします。チャットでの質問は講義の流れを妨げることなく、すぐに気づくことができます。また、学生は挙手機能を使用して質問があることを教員に知らせることもできます。いずれの方法にしても、対面式の授業と同じように、疑問が生じたときに質問できるようにしておくことが、学生のエンゲージメントを高めると考えています。事前に質疑応答の時間を決めることは便利ですが、次の段落でご紹介するように、小グループでのディスカッションと組み合わせて使うとより効果的です。

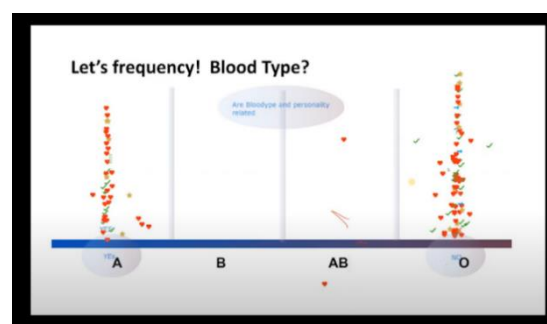
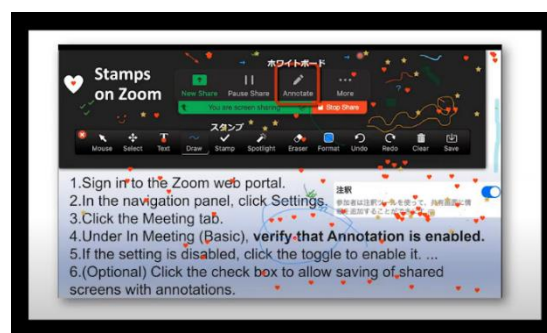
ブレイクアウトルームとライブドキュメントを併用する

Zoom では、ブレイクアウトルームと呼ばれる小グループでのプライベートなディスカッションを行うことができます。各ブレイクアウト ルームの理想的な人数は 3~4 人ほどだと考えています。なぜなら、それ以上になると喋らなくなる学生が出てしまうためです。対面式の小グループディスカッションと同じように、ディスカッションの題材や理解度を確認するための質問など、生徒に明確な指示を与えた後にディスカッションを行うと、進行が円滑になることがわかりました。さらに、多くの教員は、学生がリアルタイムで編集できる Google ドキュメントなどのライブドキュメントへのリンクをチャットで送信しておくことで、よりよい結果を得ることができたようです。このドキュメントは、グループのメンバーを書き出し、質問への回答を書き込むためなどに使用できます。ブレイクアウトセッション後にまた全員で授業を再開する際に、ライブドキュメントで回答を参照することができるため、教員は効率的に学生やグループの指名を行うことができます。

注釈

授業中の学生のエンゲージメントを維持するためのもう一つの効果的な方法が、Zoom の注釈機能ⁱⁱです。この注釈は、ホストが共有しているスライドに直接書き込んだり、絵を描いたり、「スタンプを押

す」ことができる一連のグラフィックツールです。ここで重要なのは、この注釈機能は学生と教員の両方が使用できるという点です。私は講義内の一部分で学生に注釈機能（特にスタンプ）を使うよう促し、事前に用意した様々な質問に対するフィードバックを得られるようにしています。ここでは、注釈機能を投票機能のように使用しています。一方で、授業中に教員が質問を思いついた場合（たとえば、「血液型と性格の違いに統計的な関係はあると思いますか?」など）は、教員がスライド上にその質問を書き、リアルタイムで投票を行うことができます（たとえば、既存のスライド上に「はい」と「いいえ」の回答欄を作るなど）。重要なのは、注釈を活用することで、学生と教員の両方がおのずと共有画面に関わることができるという点です。注釈の上にマウスを合わせると記入者名を表示されるため、学生がいたずらにプレゼンテーションを妨害する心配もありません。Zoom をお使いの先生方には、ぜひ注釈機能をお試しいただきたいと思います。



コメントの推奨

ICU の先生方にはお馴染みですが、授業後にはコメントシートやディスカッションフォーラムを活用することで、学生との交流を深めることができます。このようなツールは何十年も前から使われていま

すが、授業時間が終わった後も、双方向性は終わらないということを強調しておきたいと思います。

これまで述べてきたように、COVID-19 パンデミックの結果、教員はオンライン授業により様々な方法で革新することを余儀なくされました。成功するオンライン授業と失敗するオンライン授業を分ける

のは、双方向性であるという証拠が続々と出ています。双方向性が高いオンライン授業が、実際に対面式の授業よりも高い学習効果をもたらすかどうかについての結論はまだ出ていませんが、今のところ、オンライン授業に双方向性がある限り、確かに高い効果をもたらすと考えてよいでしょう

ⁱ Utsumi, Smith, Li, Kokubun, & Ishii (in preparation). *Interactivity increases perceived learning in online classes: A large-scale case study from a major Japanese university*

ⁱⁱ <https://support.zoom.us/hc/en-us/articles/4409894568845-Enabling-or-disabling-annotation-tools-for-meetings>

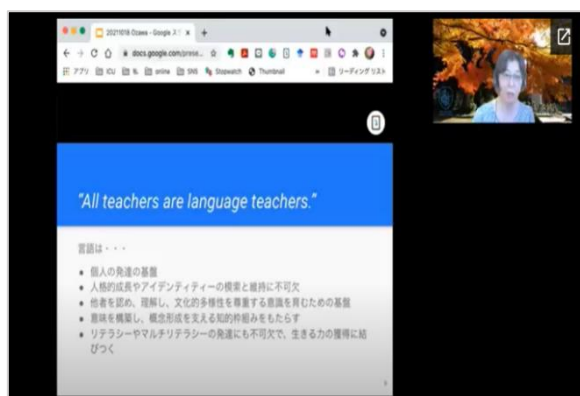
新企画「ICUにおける教育のベストプラクティス：成功する国際化 Successful Internationalization: Educational Best Practices at ICU」

学修・教育センターはFDプログラムの一環として、スーパーグローバル大学創成推進室と共同で「教育のベスト・プラクティス」をテーマにした双方向参加型セッションをオンライン開催しました。6月の第1回に続き、10、11月に実施した2回のセッションにも学内外からの多くの参加をいただきました。

第2回目は2021年10月18日に小澤伊久美 日本語教育プログラム 課程上級准教授がホストを務め、「EMIからJMI（Japanese Medium Instruction：日本語を媒介とした授業）へ～日本の高等教育にEMIの教授法を応用する試みとして～」と題して開催しました。当日参加者は約60名で、EMI教授法を日本語を用いた授業に応用する際に配慮すべき点や、スキャフォールディング（足場掛け）の考え方を紹介した後、参加者と情報交換を行いました。

第3回目は2021年11月15日に岡村秀樹 自然科学デパートメント（物理学メジャー）教授がホストを務め、「大学が行う子供のための科学教室と科学教育の意義」と題して開催しました。学内外から30名以上が参加。子供にとって（そして一般の方々にとって）の科学教育の目的、日本社会という文脈の中での科学教育の必要性について講演を行いました。保育園や小中学校での科学教室や、文系の学生に科学的思考を教える授業の様子など、具体的な事例と工夫を取り上げ、参加者からは好評を得ました。

関連ウェブサイト：<https://sites.google.com/info.icu.ac.jp/icuopenfd-bestpractices/home>



TA 向けオリエンテーション、ワークショップ

CTL では、4 月と 10 月に TA 向けのオリエンテーションとワークショップを実施しました。今年度は、ベテラン TA2 名（3 年間以上 TA の経験があり、博士後期課程に在籍）に協力を仰ぎ、企画から、コンテンツ作成、当日のファシリテーションまで行っていただきました。

1. TA オリエンテーション

【日時】4 月 5 日（月）15:00-15:30

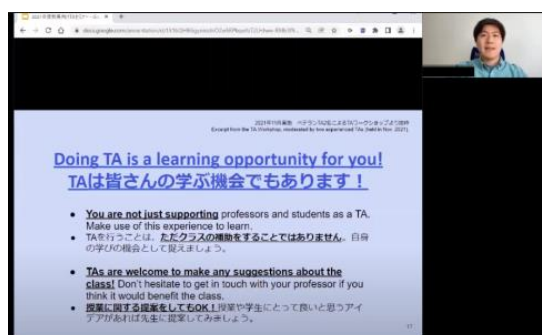
【言語】日本語・英語

【実施方法】オンライン（Zoom）

【内容】

- 挨拶、TA 制度概要（オルバーグ CTL センター長）
- 主な TA 業務の整理（ベテラン TA2 名）
- ヒントとアドバイス（ベテラン TA2 名）
- ブレークアウトルーム
- 質疑応答（ベテラン TA2 名）

【参加者数】51 名



挨拶と簡潔に主な TA 業務を整理した後に、本学で利用する主要 ICT／オンラインツール（Moodle、Google Classroom、Zoom）以外のツールを紹介しました。

- コミュニケーション、意見聴取 Slack、Mentimeter
- ゲーム感覚のクイズ Kahoot

さらに、TA は教員を補助するだけでなく、学修者であるというメッセージを伝えました。

- 効果的な教授法、大中小、様々なサイズの授業管理の管理方法などを学ぶ機会として捉え、学期の初めにゴールを定めるように促しました。（例：グループディスカッションを運営するスキルの上達。）
- 学生の学びに寄与するアイデアを率直に担当教員に提案することを勧めました。学生のモチベーションアップに繋がる施策や新しいオンラインツールの紹介と活用法を例として挙げました。

オリエンテーションの後半ではブレイクアウトルームを実施し、TA 同士の交流や情報交換の場としました。

また、オリエンテーション中に参加者が Mentimeter に書き込んだ質問や疑問は、ベテラン TA による回答を添えて、後日 TA の皆さんに共有しました。

2. TA ワークショップ

テーマを「コミュニケーション」と定め、TA 同士の情報交換や交流を図るとともに、事前アンケートで集まった疑問点や不安点を一緒に考え、解決策を出し合う機会にしました。

【日時】10月29日(金) 13:30-14:30

【言語】日本語・英語

【実施方法】オンライン (Zoom)

【内容】

- ・ 挨拶 (オルバーグ CTL センター長)
- ・ TA 業務の整理 (ベテラン TA2 名)
- ・ 事前アンケート結果の共有と、ヒントとアドバイス

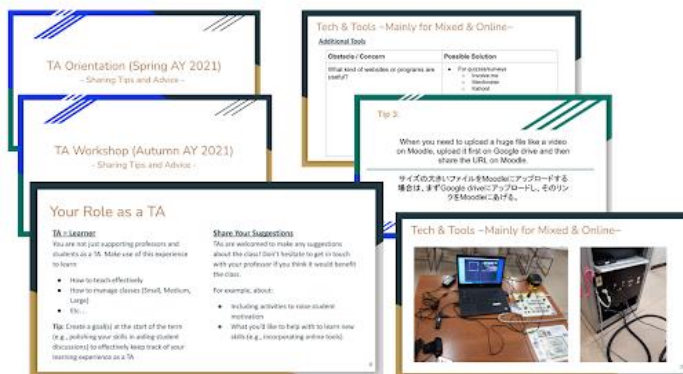
(ベテラン TA2 名)

☆ TA の2つの側面：①教育経験を得る、②コミュニケーション

☆ 担当教員とのコミュニケーションが鍵

- ・ ブレイクアウトルーム

【参加者数】55 名



事前アンケートで収集した経験の長い TA からの一番のアドバイスは、教員との密なコミュニケーションでした。

- ・ 「Talk to your instructor. They will provide all the info you need.」
- ・ 「先生としっかり連絡をとって、お互いに気持ちよく働けるようにすると良いです。」

また、以下の悩み・相談に対するアドバイスをを行いました。

- ・ 所定の勤務時間を超えてしまう業務量への対処
- ・ TA の業務範囲を見極める難しさ
- ・ 学生が質問しやすい環境の作り方
- ・ 担当する授業が自分の専門分野と異なる時の授業への関わり方
- ・ 効率的な出欠管理
- ・ ミックス式授業の機材準備
- ・ 授業が活発になるオンラインツールの紹介

後半 25 分では、最大 5 人ずつのブレイクアウトルームに分かれ、自己紹介、悩み、質問、解決策、アドバイスを共有しました。どのグループも話題が尽きず話が盛り上がっている様子でした。

コロナ禍で大学院生のための研究室や授業準備室を利用することができないため、このような TA 同士の交流の機会がない状況が続いています。上記 2 回のイベント参加者が多く、関心が高かったことを踏まえ、冬学期開始前にベテラン TA2 名や他の TA と Zoom 上で交流する機会を新たにつくることにしました。好評であれば、22 年度も継続していきたいと考えています。

(学修・教育センター)

発行：国際基督教大学 学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

1F, Othmer Library, 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan

Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp